

## 【 8 】 阿波に根付いた人形浄瑠璃

### 1 人形浄瑠璃を知っていますか？

「浄瑠璃」とは

もともと仏教用語で美しい玉のこと。美しいお姫様（浄瑠璃姫）と奥州へ下る牛若丸（源義経）との恋物語が室町時代に流行し、語り物は「浄瑠璃姫物語」と呼ばれ、後に略して「浄瑠璃」と呼ばれるようになった。もともと浄瑠璃の伴奏には「琵琶」が使われていたが、16世紀に入ると琉球から渡来した楽器「三線」を改良した「三味線」が用いられるようになった。

#### 『傾城阿波の鳴門』（順礼歌の段）

<あらすじ>阿波の主君の盗まれた名刀を探し出すよう家老に命じられた家臣の板東十郎兵衛は、妻のお弓と大坂で盗賊に身をやつして住んでいる。そこへ、父母恋しさに徳島から西国を巡礼していた娘お鶴が偶然立ち寄った。お弓は我が子と分かるが、そこで親子の名乗りをしたのでは我が子にどんな災いがふりかかるとも限らないと思い、お弓は涙を飲んで別れる。その後の「十郎兵衛住家の段」では、お鶴は十郎兵衛と出会う。我が娘とは知らない十郎兵衛はお鶴に金を借りようとし、騒がれたため誤って殺してしまう。お弓と十郎兵衛は事情を知り、悲嘆に暮れる。お鶴の懐から出てきた手紙から、名刀を奪ったのは小野田郡兵衛だと判明し、事件は解決に向かい、十郎兵衛も帰参がかなう。

<作品について>1768（明和5）年大坂竹本座で初演、近松半二らの5人の合作といわれる。

徳島藩のお家騒動と実際にあった板東十郎兵衛事件を題材に描かれた。それは、4代将軍徳川家綱の時代、当時の徳島は藍と製塩産業に力を入れており米不足であったため、幕府から禁止されていた米の密輸入を行っていた。その罪を十郎兵衛に押しつけて1698（元禄11）年に処刑してしまうという事件であった。板東十郎兵衛は実在の人物であるが、作品の内容はこの史実とは異なる。

### 太夫と三味線

・太夫：中国からきた称で五位以上の官位（貴族）を指したが、日本では、神職にたずさわる人や芸人の称号・敬称にも用いた。太夫は、「見台」の上に浄瑠璃の台本である「床本」を置いて語る。座った状態でも上半身を立った姿勢と同じにして下腹部に力を込めて腹式呼吸がしやすいように、「尻引」と呼ばれる椅子を尻の下に置き、両足の爪先を立てて座っているため、三味線奏者より一段背が高くなっている。

・三味線：細棹・中棹・太棹の種類の中で、太棹は糸が太く、撥も大きいため浄瑠璃に適している。弾き方によって表現が異なる。琉球では蛇皮（にしきへびの皮）を、日本

の内地では犬や猫の皮革を胴皮に使用している。

・外題：書物や浄瑠璃・歌舞伎の題を書物の表紙に記したものをいい、扉や本文の初めに書かれる「内題」に対する言葉である。内容としては、歴史上の事件を題材にした「時代物」、町人社会を題材にした「世話物」のジャンルがある。

## 人形遣い

18世紀初めまで、人形は一人遣いだった。1734（享保19）年に竹本座で行われた公演で三人遣いの人形が登場した。主遣いは、一段高くなるように12～30センチくらいの高さの舞台下駄を履き、自分の左手を人形の背中側の帯の下から差し込んで人形の頭（首）を操り、自分の右手で人形の右手を操る。左手遣いは、自分の右手で人形の左手から伸びている「差金」と呼ばれる長い棒を持つ。以前は、「足十年、左十年」と言われ、主遣いの役ができるようになるまでは20年以上の修行が必要だったと言われる。資料③の人形は、明智光秀をモデルに描かれた『絵本太功記』武智光秀の子、十次郎である。

## 2 人形浄瑠璃の歴史

### 人形浄瑠璃の広がり

#### 西宮と淡路のつながり

西宮神社は、平安時代の末期、「海の神」「商業の神」として蛭児（蛭子・恵比須）神を祭り、海岸に近い場所に広田神社（兵庫県西宮市）によって建立された。広田神社は、淡路島の津名郡にあった荘園から農民を呼び寄せ、西宮神社の祭神の功德を分かりやすく庶民に知らせるため、タイを釣り上げる恵比須人形を操って神徳の宣伝をさせた。室町時代末期には、広田神社は淡路島の荘園を失ったので、西宮と淡路島のつながりは薄れ、ほとんどの農民は淡路に帰村した。そうした農民の子孫から江戸時代の初期に淡路の人形座が生まれ、一部は京都や大坂に出て専門の人形遣いになり、常設の小屋で人形浄瑠璃公演を行った。

### 徳島・蜂須賀家と淡路の人形座

初代徳島藩主蜂須賀至鎮は、1615（元和元）年大坂の夏の陣の功績により、領地に淡路島を加増された。蜂須賀氏は淡路を支配するにあたって「道薫坊廻百姓」という「人形廻しを生業とする農民」の身分を作った。道薫坊とは、淡路特有の言葉で、木彫りの人形を意味する木偶から生まれた。彼らの所有する農地は狭く、農業経営だけでは生活が成り立たないため、全国各地への人形芝居興行の道を選ばざるを得ない状況だった。当時、淡路には約40の人形座があり、一座の人数は30～50人で、農閑期に西日本を中心に全国各地で興行を行った。人形座の中でも最も伝統ある上村源之丞座は、蜂須賀歴代の藩主に許可を得て興行（有料公演）を行うなど保護を受けている。1693（元禄6）年徳島城下の「東富田操場所」（徳島市南昭和町あたりか？）における14日間の小屋掛け公演では、純益が銀十六貫（2670万円）で、別に祝儀を座や個人でもらっている。（大和武生

『阿波人形浄瑠璃物語』)

◎竹本義太夫 (1668～1714年)：摂津国天王寺村（現・大阪市天王寺区）の農家に生まれる。

古浄瑠璃諸派の優れた部分を取り入れて「義太夫節」を確立。1684（貞享元）年、大坂の道頓堀で近松門左衛門の作品『世継曾我』（曾我兄弟の仇討ちと兄弟の恋愛をからめた物語）を演じて大成功をおさめた。この作品を演じた芝居小屋の持ち主は、阿波国撫養（鳴門市）出身の竹田近江とその弟（一説には子）の竹田外記（初代竹田出雲）であったと言われている。

◎近松門左衛門 (1653～1724年)：福井に生まれる。武士出身。京都に出て公家などに仕えた後、人形浄瑠璃の台本を書くようになった。竹本義太夫に『出世景清』を書いた後は歌舞伎の台本を書いていたが、その後、義太夫が創設した竹本座の座付作家として『国性爺合戦』（時代物）、『曾根崎心中』『冥途の飛脚』（世話物）など人形浄瑠璃の作品を多く手がけた。

『曾根崎心中』（1703（元禄16）年5月初演）：初演の前月、実際に曾根崎で起こった徳兵衛とお初の心中事件を題材にして書かれた作品だったため、人々の共感を得て興行的にも大成功した。

<あらすじ>大坂の醤油商平野屋の使用人徳兵衛は、北の新地の遊女天満屋のお初と恋仲にあった。主人からすすめられていた縁談を断るため、縁談先の女性の家からすでに受け取っていた持参金を自分の継母から取り戻したが、親友に頼まれてその金を貸すことになった。

結局、親友に裏切られて金を返してもらえず、死を決意した徳兵衛はひそかにお初と店を逃れ、曾根崎の森で心中する。

◎植村文楽軒：人形浄瑠璃の文楽座座元。初代（1751～1810年）は通称「道具屋大蔵」といい、阿波の吉野川中流域出身の道具屋だった。結婚後淡路に住み、19世紀初頭に大坂の高津橋南詰（現在の国立文楽劇場付近）に浄瑠璃の稽古場を開き、これが常設の芝居小屋になり、人形浄瑠璃を行う「文楽軒の芝居」、その後「文楽座」と呼ばれるようになった。座の経営が植村家から松竹合名会社に移って以後も、「文楽座」の名称は残り、大正・昭和のころから文楽は人形浄瑠璃の代名詞となった。文楽は2003年にユネスコの世界無形文化遺産に登録された。

## 淡路人形浄瑠璃

江戸時代には40以上の人形座が全国を巡業した。明治以降、最も伝統のある上村源之丞座をはじめ多くの座が消えたが、郷土芸能を守るため1964（昭和39）年に「淡路人形座」が発足、1969（昭和44）年に「財団法人淡路人形協会」が設立され、後継者育成と人形座の存続管理が図られた。1976（昭和51）年には国の重要無形民俗文化財に指定され、南あわじ市の大鳴門橋記念館（2012年8月に、同市福良港に移転し、「うずの丘 大鳴門橋記念館」としてグランドオープン）で上演を続けるとともに全国各地で公演

を行っている。文楽と異なり野外の舞台上演していたため、人形も、動作も大きい。

### 阿波の人形師・四代目大江巳之助（1907～1997年）

本名大江武雄。鳴門市大津町出身。初代天狗久に教えを請い、人形作りを始め、その後文楽座の座付きの人形師となった。太平洋戦争による空襲で焼失した文楽座の人形頭を、数年間で約300個作るという超人的な仕事ぶりを発揮し、文楽の復興に大きく貢献した。生涯の製作数は1000体に及び、1976（昭和51）年には国選定保存技術保持者に認定された。なお、人形を作る人を「人形師」といい、人形を操る人を「人形遣い」という。

## 3 阿波人形浄瑠璃の特徴

### 天狗屋久吉（初代）（1858～1943年）

本名吉岡久吉、徳島市国府町生まれ。16歳の時、川島富五郎に弟子入りして人形作りを始め、26歳の時「天狗屋」を名乗って独立したことから「天狗久」と呼ばれるようになった。86歳で死ぬまでの間、徳島市国府町に構えた工房で人形を彫り続けた。目立たせるために人形の頭を少しずつ大きくし、もともとは約12センチだった頭の大きさが、最終的には約18センチくらいまでになった。宇野千代の小説『天狗屋久吉』で取り上げられたり、映画にも2度出演するなど、最も有名な阿波の人形師である。2001年には天狗久旧工房と製品などの資料が県指定となり、2002年には「阿波人形師（天狗屋）の製作用具及び製品 附（つきたり）販売関係資料」が国の重要有形民俗文化財に指定されている。

### 阿波木偶人形の頭

木偶とは、木彫りの人形の意。阿波木偶とは、徳島の民俗芸能で使われる木製の人形を指す。

写真左：阿波人形浄瑠璃人形頭 角目頭（熊谷）作…初代天狗久（大正4年） 県指定

写真右：阿波人形浄瑠璃人形頭 娘頭（お染）作…初代天狗久（明治33年） 県指定

文楽人形は照明の乱反射を避けるため、つやを消すのに対して、阿波木偶は30回ほど塗り直して光沢を付ける。塗りには貝殻から作られる胡粉とよばれる白い顔料を水に溶いて、にかわという接着剤を混ぜたものを使用する。文楽では「文七」など役名ごとの人形があるが、阿波木偶は文楽人形に比べて種類が少なく、「角目」「丸目」など主に形状を基本にした名称で呼ばれる。1つの頭を、かつらや飾り物、衣類を変えることで幾通りもの役柄に変化させる。「角目」は主役の善人で、目尻が角張っており、顔を白く塗る。一方、「丸目」は敵役の悪人で、目尻が丸くなっており、時に顔を赤く塗る。写真右の「娘」は未婚の女性（18歳まで）の役の頭である。天狗久をはじめ、人形忠（1840～1912年）の作品など、全部で47個の人形頭が県指定の有形文化財になっている。

### 地域別農村舞台の分布

江戸時代から庶民の娯楽の花形だった歌舞伎や人形芝居は、戦前まで全国至るところ

で盛んに行われ、それを演じるために建てたものは「農村舞台」である。1967（昭和42）年から行われた調査によると、全国で1338棟の農村舞台が発掘された（うち徳島県は209棟、全国の15.6%）。そのうち1122棟が歌舞伎、216棟が人形芝居のために建てられた舞台である。徳島県には人形芝居用の農村舞台が208棟あり、これは全国の96%を占めている。人形芝居系の舞台は、舞台に向かって右側（上手）に太夫と三味線が座る太夫座が設けられているのが特徴である。農村舞台は、非藍作地帯である山間部のB勝浦川流域、C桑野川流域、D那賀川流域に多く見られる。一方、藍作地帯のA吉野川流域には農村舞台が少ない。これは、藍作地主や藍商人など当時の有力者が仮設の舞台小屋（＝小屋掛け）を建て、人形座による興行を行っていたためである。2013年現在、徳島県内の農村舞台の数は88棟である。（NPO法人「阿波農村舞台の会」による調査）

### 小屋掛け

興行のために建てられた仮設の舞台小屋を小屋掛けという。通常は16日間、長い場合は25日間の公演が行われた。現在は毎年10月に徳島中央公園内（徳島城跡）で小屋掛けの公演が行われている。

### 農村舞台

徳島では、江戸時代より神社の境内に建てた舞台で人形浄瑠璃の公演が行われてきた。村の鎮守の神社では、春秋の祭りが行われる際に、村人の間で人形浄瑠璃を楽しむようになった。常に専門の人形座を呼ぶ経済的余裕がなかったため、村人は自分たちで人形操りを稽古するようになり、その練習や発表の場として農村舞台を造った。舞台は村人の集会場や祭りの酒盛りの場、だんじりの保管倉庫など地域により様々な用途に使われていた。犬飼の舞台（徳島市）、坂州の舞台（那賀町）は国の重要有形民俗文化財に指定されている。

### ふすまからくり

農村舞台、小屋掛けとも阿波人形浄瑠璃の舞台の背景には「ふすま絵」が使用されることがあり、その「ふすま絵」を場面に応じてからくり仕掛けで転換させていくのが「ふすまからくり」である。最も多い「引き分け」という手法の場合、6～8枚のふすま絵を左右に動かして、後ろにセットされた別の絵を次々に見せていく。犬飼（徳島市）、坂州・川俣・拝宮（いずれも那賀町）、小野（神山町）などの農村舞台には「ふすまからくり」が残っており、特に犬飼では、132枚のふすまを操り出して、42景の背景を展開することができる。毎年文化の日に公演を行っている。また、吉野川流域など小屋掛け公演で用いられるふすまは、地域の神社に保管されていた。

## 4 阿波人形浄瑠璃の現在

### 阿波人形浄瑠璃の展開

「阿波人形浄瑠璃の最盛期は明治10（1877）年から明治20年ごろであったと、阿波の人形師・初代天狗久が語っている。」（大和武生『阿波人形浄瑠璃物語』より）また、天狗久の注文帳には、徳島県内の人形座として72の座名が記録されている。

### 明治～昭和の人形芝居の興行数

	明治42年	大正6年	昭和13年
人形芝居（営業）	105	32	43
人形芝居（非営業）	272	228	4

『徳島県統計書』（M41～S13年）

営業は主に淡路島人形座の興行、非営業は主に徳島県内の農村部に存在する人形座の農村舞台での公演と考えられる。

### 阿波人形浄瑠璃の文化財指定

1999（平成11）年、阿波人形浄瑠璃振興会を保持団体として、国の重要無形民俗文化財に指定された。

### 国民文化祭

徳島では2007（平成19）年と2012（平成24）年に開催された。阿波人形浄瑠璃は、阿波藍、第九、阿波おどりとともに四大モチーフとして重要なテーマとなった。国民文化祭の開催を機に復活した農村舞台もある。2009年には「ジョールリ100公演」が行われ、8カ所の農村舞台でも10公演が開催された。

### ふすまからくり復元の動き（三好市西祖谷山村<sup>うしろやま</sup>後山）

三好市西祖谷山村では昭和30年頃まで上演されていたふすまからくりの舞台を再現した。平成17年には後山地区の阿弥陀堂前で50年ぶりの復活公演を行い、平成19年6月からは三好市有形民俗文化財であるからくり襖絵の操作技術を後世に残そうと保存会が後継者育成の講習会を開催している。同市徳善地区でも復活し、市指定文化財となっている。

### 人形座・太夫部屋

人形座14座189名、太夫部屋5部屋69名（2013年公益財団法人阿波人形浄瑠璃振興会所属）。

### 阿波十郎兵衛屋敷

『傾城阿波の鳴門』に登場する架空の人物「阿波の十郎兵衛」にちなんで名付けられた、阿波人形浄瑠璃の魅力を伝える施設。館内には神社の境内によく見られた農村舞台

を模した舞台と観客席があり、阿波人形浄瑠璃を毎日上演している。江戸時代、事件に巻き込まれて処刑された実在の人物、庄屋・板東十郎兵衛の屋敷跡である。

## 伝承教室

徳島県では昭和56年から約30年間にわたって伝承教室を開催しており、受講生数はのべ1400名を超える。部活動で人形浄瑠璃をしている中学生・高校生や社会人等が広く受講している。

平成25年度は14日間開催し、48名が受講（うち中高生が24名）。太夫・三味線・人形遣いに分かれて稽古を行った。教室への参加を機に人形座に加わる人もいる。また、勝浦町や神山町などでも、地域の人形座が子どもを対象に伝承教室を実施し、後継者育成に努めている。

## 部活動

徳島市川内中学校、城北高校、小松島西高校勝浦校では人形浄瑠璃を行う民芸部が活動しており、徳島市川内北小学校や阿南市立新野中学校にも活動歴がある。県内の人形座の中には部活動をきっかけに座を結成したり、座員となった人も多い。

### 《参考文献》

- 『阿波人形浄瑠璃物語』（大和武生 徳島新聞社） 2012年
- 『阿波の農村舞台』（阿波のまちなみ研究会） 1992年
- 『国指定重要無形民俗文化財 阿波人形浄瑠璃財団法人阿波人形浄瑠璃振興会設立 50周年記念誌』（財団法人阿波人形浄瑠璃振興会） 2005年
- 『民俗文化財集 阿波の人形芝居』（徳島県郷土文化会館）1982年
- 『阿波の人形浄瑠璃』（四国大学・阿波の文化研究会） 1995年
- 『徳島地域文化研究第8号』（徳島地域文化研究会）2010年

### 《関連サイト》

- 徳島県立阿波十郎兵衛屋敷 「阿波人形浄瑠璃の世界」  
※「あらすじ&ムービーの段」に「傾城阿波の鳴門」の動画が掲載  
<http://www.joruri.info/movie/01.html>
- 独立行政法人日本芸術文化振興会「文化デジタルライブラリー」  
「舞台芸術教材で学ぶ」→「文楽」→「歴史と義太夫節」※人形浄瑠璃についての動画が掲載  
<http://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/contents/learn/edc4/index.html>
- 徳島県県民環境部とくしま文化振興課「人形浄瑠璃芝居の振興にあたって」  
<http://www.pref.tokushima.jp/docs/2005032800084/>
- 阿波農村舞台・阿波人形浄瑠璃ボランティアガイド  
<http://www.joruri.info/butai/butai.html>

## 5 ねらい

- ◎阿波人形浄瑠璃について学び，理解と関心を深めるとともに，ふるさとへの愛着を高める。
- ◎話し合いを通して，阿波人形浄瑠璃の魅力にふれ，伝統芸能として大切にすることを養う。

## 6 教材について

### 〔教材選定の理由〕

日本の人形浄瑠璃の中心は大阪の文楽であるが，人形浄瑠璃の成立や発展において，徳島の人々が大きく関わってきていること，また，文楽とは違う特徴を持った，徳島の人々の娯楽の中で生まれ，受け継がれてきた伝統芸能として阿波人形浄瑠璃があるということを知っている人は多くない。人形浄瑠璃の特徴・歴史を概観した上で，屋外で演じられることが多かったことに起因する阿波人形浄瑠璃の特徴を知ることによって，阿波人形浄瑠璃への興味・関心を高め，徳島の誇る伝統芸能として関わり，大切にしていこうとする態度を養うことを目的に，本教材を選定した。

## 7 授業展開例

	学習活動	指導上の留意点
導入 5分	・本時のねらいの説明を聞き，資料①『傾城阿波の鳴門』順礼歌の段の映像を視聴する（3分半）。	徳島の人形座で演じられる定番の外題の場面であることを紹介し，興味を持たせる。
展開 5分	1. <u>人形浄瑠璃</u> について知る。 ・太夫，三味線，人形遣いの3つが一体となって演じられる芸能であることを知る。 ・資料③の中で主遣い，左手遣い，足遣いの立ち位置を確認する。	・資料①～③を活用する。 ・三人で一体の人形を操ることの難しさと芸の奥深さを感じさせる。
10分	2. <u>人形浄瑠璃の歴史</u> について知る。 ・人形浄瑠璃の成立（京都の浄瑠璃語りと西宮神社の人形遣いが出会う），発展から現在（竹本義太夫・近松門左衛門の登場，植村文楽軒から文楽へ）の流れをつかむ。 ・人形浄瑠璃の成立，発展の過程において阿波・淡路の人々が大きく関わっていることを	・資料④を参照し，成立～発展～現在の流れを概観させ，深入りしないようにする。 ・人形浄瑠璃の歴史において，阿波・淡路の人々が大きく関わっていることに気づかせることによって，人形浄瑠璃に対する



	理解する。	興味・関心を高める。
15分	<p>3. <u>阿波人形浄瑠璃の特徴</u>について知り、その特徴を生み出した背景について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人形の頭や演じ方の特徴が人形浄瑠璃を屋外で演じていたことから生まれていることを理解する。</li> <li>・資料⑦から、地域別の人形浄瑠璃の楽しみ方の違いとその理由を考える。</li> </ul> <p>・徳島で人形浄瑠璃が人々の生活の中にある娯楽として大切に育てられてきたことを理解する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料⑤～⑩を活用する。</li> <li>・資料⑧小屋掛け，資料⑨農村舞台で演じるのに使われていた資料⑥人形頭の特徴に注目させる。</li> <li>・藍作で繁栄していたA吉野川流域では，小屋掛けで淡路の人形座による有料公演で，それ以外の地域では，農村舞台で地元の人々が結成した人形座による公演で，人形浄瑠璃を楽しんでいたことを理解させる。</li> </ul>
10分	<p>4. <u>阿波人形浄瑠璃の現在</u>について知り，これからどのように関わられるかを話し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人形芝居系の農村舞台の数が全国一であること，資料⑩ふすまからくりがあることにもふれる。</li> </ul>
結論 5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時のまとめと次の文化に関する学習の予定を聞く。</li> <li>・各自で自己評価をし，ワークシートに○をつける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の学習で初めて知ったことを挙げさせ，今後，阿波人形浄瑠璃と関わろうとする態度をもたせる。</li> <li>・阿波人形浄瑠璃に関する学習が他の文化学習への興味付けに繋がるように留意する。</li> </ul>